

博士学位論文

Textsemantik des Antezedenten
und
semantische Funktion des Relativsatzes
「先行詞におけるテキスト意味論と
関係文における意味上の機能」

日本語要約

立教大学大学院 文学研究科

クラウス マヌエル

目次

(日本語翻訳)

- 0. 序論
 - 1. 関係文の意味機能
 - 1.1. 特定化機能関係文と叙述機能関係文
 - 1.2. 制限的用法関係文と非制限的用法関係文
 - 1.2.1 識別基準としての述語的名詞句
 - 1.2.2 識別基準としての発語内行為的指標
 - 1.2.3 識別基準としての前方照応的変形と主文テスト
 - 1.3. 先行詞のテキスト意味
 - 1.3.1. 未導入先行詞と既導入先行詞
 - 1.3.2 関係文意味機能識別のための規則
 - 1.3.3. 先行詞となる名詞の意味論
 - 1.3.3.1. 「未導入」先行詞における叙述機能関係文
 - 1.3.3.2. 「既導入」先行詞における特定化機能関係文
 - 1.3.4. 先行詞における形式上の定と不定
 - 1.3.4.1. 未導入先行詞における形式上の定
 - 1.3.4.2. 既導入先行詞における形式上の不定
 - 1.3.4.3. 先行研究における冠詞記述
 - 2. 関係文をめぐる形態・統語論
 - 2.1. 先行詞と関係代名詞の格
 - 2.1.1. 先行詞と関係代名詞の格の分析
 - 2.2. 関係文の接触配置と間隔配置
 - 2.2.1. 間隔配置における中間要素
 - 2.2.2. 関係文位置と関係文意味機能
 - 2.3. 関係文による主文中断
 - 2.3.1. 関係文による主文中断の形態・統語上の意義
 - 2.3.2. 関係文による主文中断と関係文の意味機能
 - 3. 終わりに
- 参考文献

〈博士論文要約〉

序論

本論は、先行詞のテキスト意味と関係文の意味機能の相関関係を明確にし、その相関関係が関係文の統語的条件とも関係するかを検証することである。先行研究と異なり、本論は先行詞のテキスト意味として、まだコンテキストに導入されていない先行詞である「未導入先行詞」と、既にコンテキストに導入された先行詞である「既導入先行詞」を区別し、関係文の意味機能として、指示対象を特定する関係文である「特定化機能関係文」と、指示対象について叙述する関係文である「叙述機能関係文」を区別する。分析対象は、現時点ネット上にアクセスすることができるオンライン雑誌 („Der Spiegel“, „Stern“, „Geo“, „Bild der Wissenschaft“) 掲載の時事的記事よりランダムに集めた関係文 1050 例である。

先行詞テキスト意味と関係文意味機能の間の相互関係を考察する際には、先行詞テキスト意味のみならず、「先行詞となっている名詞の一般的意味」、「先行詞における付加語」、そして先行詞における「不定冠詞群 (=「不定」)」および「定冠詞群 (=「定」)」も考慮する。関係文が「接触配置」あるいは「間隔配置」になる統語上の配置の条件を分析より導き出し、関係文意味機能に関係文の配置が影響を及ぼすかも検証する。

第 1 部 関係文の意味機能

第 1 部では、先行研究を批判的に検討した後、収集された用例を、先行詞テキスト意味「未導入先行詞」および「既導入先行詞」、関係文意味機能「特定化機能関係文」および「叙述機能関係文」という観点から分析し、全体の約 7 割を占める用例から、「未導入先行詞」には「特定機能関係文」が続き、「既導入先行詞」には「叙述機能関係文」が続くという「解釈論理」をテーゼとして打ち立てる。そしてそのテーゼの反例になる残り 3 割の「例外」も、冠詞群の意味用法から規則的に説明できることを証明する。この「解釈論理」に合致する関係文の用法においては、1) 「未導入先行詞」に「特定化関係文」が続くケー

スをタイプ 1, 2)「既導入先行詞」に「叙述機能関係文」が続くケースをタイプ 2 とし,「解釈論理」に合致しない「解釈論理不整合ケース」においては, 3)「未導入先行詞」なのに「叙述機能関係文」が続くケースをタイプ 3a, 4)「既導入先行詞」なのに「特定化機能関係文」が続くケースをタイプ 3b, と区別する。

「解釈論理不整合ケース」タイプ 3a は,「先行詞となっている名詞の一般的意味」,「先行詞への付加語」,もしくは「ディスコースにおける既知事象」に基づいて説明することができる。「解釈論理不整合ケース」タイプ 3b は,既導入名詞であっても,関係文先行詞の名詞と,それ以前の同じ名詞の指示対象が異なっている「外延相違指示」がその原因となっていると説明することができる。

先行詞テキスト意味における意味と形式の一致と不一致を明確にするため,先行詞が不定冠詞群を伴うか(「不定」),それとも定冠詞群を伴うか(「定」)を検証する。その際,先行詞テキスト意味と冠詞の間で,「未導入先行詞」は「不定」,「既導入先行詞」は「定」という典型的な冠詞用法に反する「形式・意味不整合ケース」が観察される。その不整合ケースには, 1)「未導入先行詞」なのに「定」であるが,解釈論理に合致する「特定化機能関係文」が続く特殊ケース 1, 2)「既導入先行詞」なのに「不定」であるが,解釈論理に合致する「叙述機能関係文」が続く特殊ケース 2, 3)「未導入先行詞」なのに「定」であり,かつ解釈論理に合致しない「叙述機能関係文」が続く特殊ケース 3, 4)「既導入先行詞」なのに「不定」であり,かつ解釈論理に合致しない「特定化機能関係文」が続く特殊ケース 4 が区別される。これらの特殊ケースの説明には,冠詞の機能が手掛かりとなる。

「定」の意味機能を「テキスト内前方照応機能」,「テキスト内後方照応機能」,「テキスト外既知対象照応機能」,「ディスコース領域既知対象照応機能」に区別すること,「不定」の意味機能を「新対象指示機能」,「既知対象指示機能」,「唯一対象指示機能」,「外延相違指示機能」に区別することによって,特殊ケース 1 では「テキスト内後方照応機能」ないしは「テキスト外機知対象照応機能」が,特殊ケース 2 では「機知対象指示機能」もしくは「唯一対象指示機能」が,特殊ケース 3 では「ディスコース領域既知対象照応機能」,そして特殊ケース 4 では「外延相違指示機能」がそれぞれ問題となっていると説明することができ,

本論が突き止めた「解釈論理」の例外は、冠詞の意味機能によって説明できることが判明する。

第2部 関係文における形態・統語上の機能

第2部の分析対象は、「先行詞の格」および「関係代名詞の格」、「接触配置」および「間隔配置」、また「関係文による上位文の中断」(＝中断配置)である。

「接触配置」と「間隔配置」は、関係文が先行詞に直接続くか、何らかの要素を介して続くか、という関係文の配置を問題とし、先行詞と関係代名詞との間に「中間要素」があれば「間隔配置」、そうでない場合には「接触配置」とする。

「先行詞の格」と「関係代名詞の格」に関しては、その両者が比較的単純な形として出現することが明らかになる。「先行詞の格」および「関係代名詞の格」はともに1格の形で出現することが大多数を占める。この「単純化傾向」と名付ける傾向は、心理言語学領域での子どもの言語習得において指摘される傾向に合致する。

「接触配置」と「間隔配置」に関しては、数量的には稀である「間隔配置」となる条件は、先行詞と関係文との間に挿入されている「中間要素」の性質に左右されていると判明する。「間隔配置」の条件は、「中間要素」が「右枠構造要素」であることが特徴的であるのに対し、関係文が「接触配置」となり、上位文が中断された場合、関係文の後に置かれる、上位文の「余り要素」では「右枠構造要素」単独の出現は非常に少ないという違いが観察される。もし「接触配置」関係文によって中断された上位文の「余り要素」を、先行詞と関係文の間の「中間要素」として配置し、関係文を「間隔配置」にするならば、関係文がどの先行詞に掛かるかについての「指示明白性」が失われるケースであることが確認される。「接触配置」と「間隔配置」および「中断配置」は統語上の条件のみに左右され、先行詞のテキスト意味および関係文の意味機能にも影響を与えないという結果が関係文の統語分析からは得られる。